HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自己実現する熊野参詣者 ： 現代化される文化資源
Author(s)	岡本, 亮輔
Citation	CATS 叢書, 11, 73-78
Issue Date	2017-03-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66702
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS11_10.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

自己実現する熊野参詣者

現代化される文化資源

岡本 亮輔
北海道大学メディア・コミュニケーション研究院 准教授

1. 観光資源の創造と演出

観光対象となる場所には，人々を惹きつけるアトラクションがなければならない。何か見るに値するもの，体験するに値するものがあるからこそ，人々はそこを訪れる。したがって，観光化とは，観光資源を元にアトラクションを作り上げ演出するプロセスだと言うことができる。

観光アトラクションの創造・演出については，これまで多くの議論が蓄積されてきた。その中でも，E・ブルーナー（1989）の論考においては，真正性を対象に客観的に内在するものとする素朴な視座は十分に批判されている。極論すれば，観光の真正性は，それが体験に関わるものであれ，対象に関わるものであれ，主観的にしか調達しえないものなのである。

具体例として，八重山諸島の竹富島をとり上げてみよう。同島は民芸の島とも呼ばれ，伝統的な歌謡・民俗芸能・祭礼・聖地などが保持伝達されてきた場所として注目されている。中でも赤瓦屋根の民家と白砂の道が作り出す印象的な景観は，竹富島を象徴する伝統的な建築文化として語られる。屋根の赤と砂の白のコントラストは，観光ガイドで必ずと言って良いほど提示される。そして，島の中心集落は，1987 年に重要伝統的建造物群保存地区に選定されており，家を新築する場合には，赤瓦か草ぶきの平屋を建てなければならないといった規制も存在している。

このように，赤瓦屋根は竹富島の重要な観光資源であり，島の歴史文化の象徴になっているのだが，実のところ，これは近代以降に創られた伝統である。福田（1996）によれば，竹富島に赤瓦の家屋が現れるのは，人頭税廃止後の 1905 年である。また，赤瓦の家を建てるには，大工を雇い瓦や建材を購入しなければならず，当初はごく一部の富裕層に限られていた。つまり，赤瓦の家の増加は島の近代化と富裕化を示すものなのだ。そして，伝建地区選定を通じて現在目指されている赤瓦の家の街並み保存は「過去の再現ではなく，富の象徴としての瓦屋が並ぶ幻の姿」を追い求めているのである。要するに，過去に一度として存在しなかった景観が，本物の伝統として位置づけられているのである。

本稿の目的は，観光的演出がもたらす創造性の一切を批判することにはない。観光的な文化創造には地域アイデンティティを醸成し，伝統文化の保護のための資金調達といった

メリットがある。こうした裏づけがなくては，地域や文化の保持伝達は不可能になってしまう。

しかし，他方で，観光的演出の過程において，伝統文化に対して，現代的な価値観・倫理観からの過度の読み込みが行われる事例も見受けられる。物質的遺産だけからは到底生み出せないような過去の社会文化についての言説が，観光の現場において流通している。こうした言説は，時として，当該の伝統文化を保持伝達するための下地というよりも，それを積極的に改変するような方向に作用するのである。

2. 物を見ない観光客

文化資源に対する過剰な読み込みの事例はいくつもあるが，本稿では熊野の事例をとり上げてみたい。熊野は，2004 年 7 月に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界文化遺産に登録されたことでも知られているだろう。和歌山県・奈良県・三重県の三県にまたがる物件だ。金峯山寺，熊野三社，青岸渡寺，高野山金剛峰寺といった寺社と共に，広域に点在する霊場の間をつなぐ 300km を超える道そのものが登録されているのも特徴である。

世界遺産登録がもたらす影響の是非についてはさまざまな議論があるが，中でも，対象保護のための制度が，特に日本では観光促進の手段に変質していることはしばしば指摘されてきた。熊野はそれを象徴する場所と言っても良い。

2004 年の世界遺産登録からおよそ 1 年後，話題になったのは大門坂の苔の消失だった。大門坂は那智山へと続く石畳の美しい道だ。しかし，急増した観光客が登山靴で歩いたため，苔が削り取られてしまった。苔は保護対象ではないが，大門坂の雰囲気には欠かせない要素であった。物を保護するはずの世界遺産登録によって，長い時間をかけて作られてきた苔が消えてしまったのは皮肉としか言いようがない。

こうした状況は加速している。2016 年，闘鶏神社の追加登録を見越して，田辺市は駅前の商店街に外国人観光客用の免税カウンターを開設した。明らかに追加の世界遺産登録による集客効果をあてこんだものだ。同県では初めての商店街の免税カウンターとなった。一方，免税カウンター開設とほぼ同日，闘鶏神社についての残念なニュースが報じられた。世界遺産である前に国史跡に指定されていたが，神社が景観保全地区の樹木を無断伐採した。本来ならば文化財保護法に基づいて，市の教育委員会の許可を得る必要があったが，申請を怠っていた。市教育委員会も同社の文化財保護に対する認識不足を批判した。世界遺産登録と文化財保護が結びつかなかった例と言って良いだろう。

世界遺産の観光ブランド化については，世界遺産登録の実務担当者が早くから警鐘を鳴らしていた。小田（2010）によれば，熊野に来た観光客の多くは「木を見て森を見た」と勘違いしている。熊野の世界遺産としての価値の根源は，国宝や重要文化財に指定された文化財と神仏習合が生み出した文化的景観にある。ユネスコに対して，これらの価値を中心に説明することで世界遺産登録に至った。

しかし，観光客の大半は，そうした物には興味を持たない。歴史的知識を持たずにやって来る人がほとんどで，古道を歩いても家の裏山と変わらないといった感想をもらす。世界遺産というラベルに惹かれて来てみたものの，実際にはユネスコ公認の散歩道といった程度にしか認識されていないのだ。また小田によれば，地域や寺社関係者などのホスト側においても，正確な歴史的知識への無関心さが目立つというのである。

3. 疑似宗教化する語り

本稿が特に注目したいのが，過去の熊野の文化を演出する過程で，疑似宗教と言えるような実践や語りが生まれていることだ。そして，それらを県や市のような自治体が後押ししていることである。

「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産のうち，中核の一つと言えるのが熊野本宮大社（田辺市）だ。神武東征の物語に登場する三本足の八咫烏と関係づけられることでも知られている。同社のそばには世界遺産熊野本宮館という施設がある。2009 年，世界遺産登録 5 周年を機に，和歌山県と田辺市が総工費 8 億円以上をかけて創設したものだ。熊野古道の観光情報の提供を主目的とする施設である。

同館には，県世界遺産センター，市熊野ツーリズムビューロー本宮事務所，熊野本宮観光協会に加えて，NPO 法人「熊野で健康ラボ」（以下，健康ラボ）と熊野本宮語り部の会が入っている。注目したいのは，これらの団体の活動だ。健康ラボは，世界遺産登録によってブームとなった熊野観光を一過性のものにしないために，健康保養地として熊野をブランド化しようとしている。そこで持ち出されたのが，熊野古道を歩くことによる癒し効果である。

健康ラボが運営するウェブサイト「熊野で健康.com」では，たとえば「熊野の心休まるセラピースポット」として大斎原（おおゆのはら）が紹介される。熊野本宮大社は，1889 年の水害まで，熊野川・音無川・岩田川の合流地点の中州にあった。この旧社地が大斎原と呼ばれる。同サイトでは「大斎原は理想的な風水地形！！」という見出しがつけられ，周囲に森・川・池があることで「地形等，自然環境の保存が大斎原のもつエネルギーの維持につながる」という説明がされている。

さらに，この文章の出典として，国土交通省近畿運輸局・和歌山県「世界遺産を活用した健康増進観光のあり方に関する基礎調査」が挙げられている。同文書でも「理想的な風水地形である『大斎原』には，人々が特別な場所であると感じる『聖地の力』が感じられ」，「旧社地（大斎原）の復活は，地域再生への重要な要素」と説明される。そして結論は以下の通りだ。

> 『祈り』と『癒し』とは，まさに宗教と医療ということであり，根源的に同質であるこれらの融合が（現代人の根源的な心身の治療には）重要である。『祈り』と『癒し』

の連携により，既存の熊野参詣客を，癒し型の長期滞在へと誘引していくことが可能となる。

パワースポットのガイドブックならいざしらず，公的性格の強い文書としてはかなり思い切った表現だ。十分に宗教的な言説と言って良いだろう。ちなみに同文書では，「植林や間伐，古道の維持管理，生活体験等がニートの有効な就業支援プログラムになる可能性」まで述べられている。

そして，こうした構想に基づく実践として，健康ラボはウォーキング・プログラムを提案する。いずれも，「熊野セラピスト」や「語り部」と一緒に古道を歩くものだ。健康ウォーキング，リラクゼーション系，メタボ系の 3 つがあるが，大斎原や森の中での瞑想，川や温泉での足浴といった熊野地形療法，「眠っている自身の力を引き出すことで，免疫力を高める」ための「五感エクセサイズ」など，スピリチュアルなプログラムだ。添えられた写真には，パワースポットでは定番の大樹に抱きつく人々や森の中で寝そべる人々の姿を見ることができる。

4. 現代化される伝統文化

本稿は，こうした疑似宗教的な実践や語りの発生を，たとえば政教分離に抵触する恐れがあるといった形で原理的に批判をしたいわけではない。指摘したいのは，観光促進を目指すあまり，熊野の文化遺産や伝統が過度に現代の社会文化に適合的なものへと読み替えられていることである。

健康ラボのウェブサイトには，「熊野セラピー　～自然と文化からパワーをもらう～」といった文言がおどる。ヘルスツーリズムの紹介ページでは「癒しの地・熊野からのメッセージ」として，熊野は「歴史と対面するだけの世界遺産」ではなく，「ストレス社会に生きる現代人の疲弊した心身を癒し元気にする地でありたい」と述べられる。そして，先の大斎原の紹介の下には，熊野本宮大社宮司の言葉として次のような文章が書かれている。

> 石の祠の前にある大斎原の中央にあたる場所で目を閉じ，ゆっくり深呼吸をして，たたずんでみてください。
> かつてここを訪れた参拝者は長い旅路の末にようやくこの地に足を踏み入れました。
> そしてこれまでの自分を変えようと，新しい自分に生まれ変わろう，本来の自分を取り戻そうと，この場所を訪れたのです。
> ここを訪れることが新しい自分を見つけるチャンスなのです。
> ここで熊野の精霊と向き合ってみてください。
> 大斎原はそんな力が宿っているところです。

新しい自分に生まれ変わる，本来の自分――平安時代の熊野参詣者たちは，本当に上のような就活中の大学生が感化されていそうな自己啓発系の目的意識で熊野を訪れていたのだろうか。現代の観光客にアピールするための演出とはいえ，歴史や伝統を短絡的に再解釈しすぎではないだろうか。文化財と文化的景観によって世界遺産登録された場所であるのに，それをとり巻く語りは，地形による癒しや森が発するエネルギーへと収斂してしまう。こうした状況は，伝統文化の保護伝達とは程遠いものだろう。

そもそも，熊野古道という文化遺産自体が世界遺産を目指す運動の中で創り出された。三重県の古道については，大野（2008）が詳しい聞き取りを行っている。それによれば，世界遺産運動が盛り上がる前は「古道」という名称すら存在せず，地域住民の生活道路として存在してきた。2000 年頃までは，観光客もまったく訪れなかった。また世界遺産登録されることで，私有財産が人類の共有財産として強制的に普遍化され，地域住民が生活するために行う狩猟や伐採も禁止された。うがった見方をすれば，現代の地域社会と文化の改変と規制の上に想像的に復元されたのが，癒しと自己実現の熊野古道なのである。

前近代の伝統文化の論理は現代の価値観や倫理観と合致せず，むしろ反発することが多い。そうしたものから，観光的に耳ざわりが良く都合の良い要素だけをとり出して改変するのは歴史や文化の伝達とは正反対の営みだ。観光文化の創造は，真正な歴史伝統の伝達に必要な経済的基盤や共同性を確保させてくれるのと同時に，伝統文化の恣意的取捨や歴史の改変と紙一重であることを自覚しなければならないはずである。

文　献

Bruner, E.M.
1989　Tourism, creativity, and authenticity. *Studies in symbolic interaction*, 10(1), pp. 109-114.

福田珠己
1996　「赤瓦は何を語るか―沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動」『地理学評論』69(9):727-743。

国土交通省近畿運輸局・和歌山県
2005　『世界遺産を活用した健康増進観光のあり方に関する基礎調査』。

小田誠太郎
2010　「世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」―その足跡と課題」『ECPR』2010(1):24-30。

大野哲也
2008　「地域おこしにおける二つの正義―熊野古道，世界遺産登録反対運動の現場から」『ソシオロジ』53(2):73-90。

ウェブサイト

熊野で健康.com
http://www.kumano-de-kenko.com/　（参照 2017-1-24）